

よりよい授業を求めて～「目標からその先へ」

——大学における第二外国語授業実践報告：「フランス語演習 I.II」を中心に——

前 田 美 樹

0. はじめに

教壇に立ち始めて4年が過ぎた。これまでの日々は、「フランス語を教えるということはどういうことなのか？」という、日頃から抱いていた問いに自分なりの答えを探すために、試行錯誤しながら自分の授業を作ることに精一杯だった。そして近頃自らの問いの答えの一つとして、「教えることは学ぶこと」ということを意識するに至っている。

その意識に導いてくれたのが、「関西フランス語教育研究会 Rencontres Pédagogiques du Kansai¹⁾ (RPK)」への参加である。RPK というのは、毎年大阪で2日間にわたって行われているフランス語教師の集いであり、そこではフランス語教師が自分の実践をアトリエという形で発表し、意見交換および、議論を交わすことで、よりよい授業づくりを目指していくものである。とりわけ「Rencontres」というだけに、そこで重要なのは、何よりも「出会い」であるが、その RPK において、2011・12年には「若手教師の悩み」というアトリエを行い、多くのベテラン教師や同世代の教師と出会い、様々なアドバイスをすることができた。

また、教師としての自分を磨くために、2012年の3月24日(土)から3月27日(火)の4日間、東京にて開催された「フランス語教育国内スタージュ」に参加、それに引き続き、2012年夏にカナダのケベック州にあるモントリオール大学 Université de Montréal で7月23日から8月10日にかけて、三週間にわたって行われた、ケベック州政府主催フランス語教員スタージュ Stage en didactique du français langue étrangère, culture et société québécoises²⁾にも参加した。教師としての自分自身が教室を出て、広い世界に出て様々な人と出会い、そして「学ぶ」ことを経験し、ようやくフランス語を教えるための基礎知識を身につけることができたように思う。

そして現在、日々の実践や小さな研究会、さらには

大きな学会への参加などの経験を通して、少し冷静に自分自身の行っている授業を一步引いて客観的に見ることができるようになり始めたが、自分の成長はもちろん、これからは今までよりも自分の経験や学びが、授業での実践に還元され、活かせるようにしなければならない。そうするためには改めて、学生の自発的な学びを第一に考え、自分の授業を見つめ直すことが必要である。そのためには、今後どのような実践が必要なのかということを、本論考では現状報告を踏まえ、考察していきたい。

1. 現状報告：

「フランス語演習 I.II」を中心に

現在自分が勤務している甲南女子大学では、選択科目の第二外国語として、フランス語の授業が複数開講されている。その中で3つの講義を担当しているが、今回は初級者のクラス「フランス語演習 I.II」での授業実践を中心に、実践報告を行いたい。

この授業は自由選択の授業で、週1時間、初心者(débutant)を対象とした授業である。第二外国語としてのフランス語を本格的に学びたいという学生には、「フランス語 I~VIII」という「I」から「VIII」までを順に履修してゆく週に2回のクラスがあるが、これから報告を行う「フランス語演習」という授業は、「I」から「IV」までの開講となっているものの、「通年」や一年生から「I」から順を追って履修しなければならないといった縛りが無い科目となっている。とりわけ「フランス語演習 I」や「フランス語演習 II」という授業は「フランス語のはじめの一步」、という「入門」の授業であるという側面を持ち合わせている。そのため「授業のねらい」は、「フランスにいつか行ってみたい、フランス語がどんな言語か少しでも知りたいという願いを持つ学生のために、フランス文化とフランス語の学びの第一歩となる」ことであり、到達目標は「フランス語の初歩を理解し、フランス文化につ

いて調べることを通して、異文化理解を深める」としている。

履修する学生の所属する学科は多岐に渡る。文学部はもちろんのこと、看護学科の学生が履修することができるのも特徴である。構成メンバーは、1年生から4年生までと各学年の学生が集まる。受講者数は2012年度前期28名、後期18名、2013年度前期21名、後期20名であった。近年では、3回生、4回生になってからフランス語に興味を持つ学生も少なくない。長期休暇中の個人旅行でパリに行きフランス語に興味を持った学生が、3、4回生で履修することもあり、このような様々な状況にありながら、「ちょっとフランス語を勉強してみたい」という学生のニーズにも答えるのが、この「フランス語演習 I.II」という授業なのである。

教材についてであるが、フランス語学習の「はじめの第一歩」という位置づけから、授業では、シンプルなディアログに最小限の文法事項、カラー刷りで文化紹介の比重が多いものを使用した。2012年度前期には『トライ!フランス語』*F comme Français* (駿河台出版社)を、後期には高校生を想定して作られた教科書でありながら、場面を演じることでフランス語を積極的に身につけることができるという、『発見、フランス語教室』*A la découverte* (第三書房)を使用した。また2013年度では、前期には、Webと連動した教科書『なびふらんせ』(長崎出版)を、後期には『なびふらんせ』との併用で、コミュニケーション力に注目した教科書『Parlons-en!』(朝日出版社)を使用した。

毎年4月の第一回目の授業オリエンテーション時に、第二外国語としてフランス語を履修しようという学生の考えはどんなもので、どんな思いを持っているのかを知るために「授業始めのアンケート」を行っている。このアンケートでは、フランス語を履修した理由や、目標を書いてもらう。これは、学生がフランス語を学ぼうとする時に、どのようなモチベーションを持っているのかを知るために行っていることである。この授業の始めのアンケート結果と、授業オリエンテーション時に学生と話してみて捉えた雰囲気や参考になり、学生からのニーズを踏まえた上で、授業が始まる前にあらかじめ設定していた計画に軌道修正を加えながら進めていくことになる。

2012年の4月のアンケートで学生が書いた、なぜフランス語を履修したかという理由は以下のとおりである。

〈フランス語演習 I:履修理由〉

- ・英語以外の言語を学びたかった
- ・語学を勉強したかった
- ・興味のある語学だったから
- ・フランスにあこがれている
- ・フランスに興味があった
- ・将来フランスに行きたい
- ・将来フランスに旅行したい
- ・フランスに行ったので、しゃべれるようになりたいと思った
- ・フランス料理店で働いていて、全くフランス語がわからないので、もう少しフランス語を聞き取れて、話せるようになりたい
- ・お菓子作りが好きで本場のフランスで学びたいのと同時にいつかは住みたい

次に、アンケートに回答された、前期の目標を大体まとめると、次のようになる。

〈スタート時の目標〉

- ・日常会話(11名)
- ・仏検の取得(10名)
- ・自己紹介ができる(6名)
- ・フランス語の基礎(4名)
- ・フランス語が聞き取れる(2名)
- ・その他(1名)

具体的に見てみると、まず、日常会話と答えた学生が11名いたのだが、「会話をやってみよう」、「日常会話を話せるようになる」、「少くらの会話ができるようになる」、「簡単なあいさつ」、「日常生活程度ができるようになりたい」、「自己紹介と挨拶ができるようになる」、「道を聞けるようになる」というように、ほぼ半数近くの学生の当初の目標設定は「日常会話ができる程度の語学力」を目指していることがわかる。

また、目標を仏検へのチャレンジに設定する者も多い。たとえば「検定もとれるレベルまでになりたい」、「仏検5級を取る」、「仏検4級を取る」などこちらも10名と、半数近くの学生が目標に定めている。

次に多かったのは「フランス語で自己紹介ができるようになる」という6名である。また、「フランス語を学ぶのは始めてなので、基礎がわかるようになる。単語力をつける」、「覚えなおす。フランス語の基礎を知る」といったフランス語の基礎や仕組みをマスターすることに目標設定したものは4名いた。

「言われていることがわかるようになる」や「フランス語が少しでも聞き取れるようになる」というような、聞く力をのばすことを目標にした者が2名、その他には「将来的にはフランス旅行して、騙されない程度の力を身につけたい」という目標を書いた学生もあった。2013年度の4月に同じアンケートを行ったが、結果はだいたい同じような結果となった。これらを学生らが第二外国語のフランス語を学ぶときの「スタート時の目標」としてらえ、次にクラスについて紹介する。

このクラスでは、毎時間、前時に学習したところから小テストを行う、ないしちょっとした *activité* を行うようにし、クラスの雰囲気づくりに気を配った。大体は10問程度で単語や動詞の活用を確認する。また、小テストの採点は自分で行うのではなく、近くに座った知らない学生と行わせるようにした。それを毎回行うことで、クラスのメンバーのことも徐々に知るようになるにつれて、学生の意識に変化があらわれるようになった。当初は少し大人しかった学生も、授業の雰囲気を上げていくような数名の学生に引っ張られ、次第に打ち解けた空気で毎回の授業は進んだ。小テストだけでなく、ディアローグのやりとり練習などのペアの組み合わせは、同じ人とやらずに、毎回違う相手を選んで行わせることにした。そうすることで、クラス全体に積極的な雰囲気が生まれた。

当初のねらい通り、フランス語の基礎と発話練習、フランス文化理解と、授業は順調に進んだが、時が過ぎ、ゴールデンウィークが終わり、6月を迎えた頃には、学生に疲れが見えはじめる。当初の目標通りに簡単な挨拶、自己紹介などを身につけたが、やはり簡単な会話するにも、文法規則習得の必要性が見えてくることとなる。4月に新たな気持ちで始めたフランス語の学習も、前期が終わる頃にはフランス語学習の“難しさ”や“大変さ”を理由に途中で挫折する学生は少なくないが、ここで浮彫になるのが、普段の授業において、「学生のモチベーションをいかに維持するか」という課題である。

Avoir や *être* の活用や、*-er* 動詞以外の動詞の登場、‘*bonjour*’「こんにちは」や‘*chat*’「猫」や‘*chien*’「犬」のような基本的単語を知るだけでは、外国語でコミュニケーションを円滑に進めるためには十分ではないということに、学生自らが気づき始める頃からは、フランス語が「難しい」や「大変」とあるという言葉が聞かれるようになる。そうなってくると、授業中の集中力は低下し、文法の話が始まると居眠りしてしまう学

生も出てくることもあった。また、「モチベーションのある学生」と「少ない学生」、「自信がある学生」と「自信が無い学生」、「自信はある」、ないし「自信はありすぎるが、なかなか着実に努力できない学生」など、様々な状況の学生が出てくるようになった。

また、毎回の小テストに関しては抵抗がなかった学生らも、前期の締めくくりにまとめのテストを行う時、これまで学習したことの全範囲を試験範囲にすれば、どこをどのように復習したらよいかかわからず、思うように成果を出せない者も少なくはなかった。

授業の最終日には、今学期の感想を書いてもらったが、「授業は楽しかったけど、フランス語は難しかった」、「フランス語が少しでも知れてよかった」、という比較的前向きなものが多かったものの、結果として、学期を通して授業は楽しくできたものの、フランス語力そのものの目標達成や学生の自己評価が低かった点に関しては、課題が残るものとなった。

後期の授業では、学生に「授業シート」を配布し、毎回の授業で何を学習したのかを自ら自己管理できるようにした。まずシートには「目標設定」を書く欄を設け、自分が学期のはじめにどのような目標を立てたかが、常に確認できるようにし、少なくとも自分が最初に抱いた初心を忘れずにいることができるようにした。日付欄には出席なら○、遅刻なら△、欠席なら×と、自分の出席状況を記入、そして内容欄には「今日学んだこと」を記入し、講義の進み具合や内容をその都度意識し把握することで、「今自分がどこにいるのか」、というのを明確にするようにした。その結果、前回の授業で何を学習したかわからないといったことや、「今自分がいったい何度授業を休んだのか教えてくれませんか?」というような、以前には度々あった人任せな質問が、全く無くなった。

また、シートの「授業メモ」の欄には、小テストの点数を記入し、自分が毎回どのような結果を出しているのかを明確にできるようにした。授業後にそのシートは教師が回収し、小テストや提出物の出来に関してコメントを入れたりし、お互いのコミュニケーションシートになることもある。

前期の「フランス語演習Ⅰ」に引き続き、後期の「フランス語演習Ⅱ」も履修した学生が「授業シート」に後期の目標として記載したのは以下のとおりだった。

〈後期の目標〉

- ・フランス語で会話できるようになりたい
- ・フランス語で挨拶などの会話ができるように頑張る
- ・小テストを毎回覚えて来て、少しはフランス語を話せるようになる
- ・フランス人と出会って楽しく会話する
- ・少しでもフランス人教諭と話せるようになる
- ・仏検受けられたら、合格できるように！！
- ・フランス語検定4級取得するぞー！
- ・文法を頑張る
- ・前期より成績アップ
- ・前期より頑張って授業に来る
- ・単語テスト頑張る
- ・AAを取れるように頑張る

前期に立てた目標よりも、目標がより具体的になり、現実的になっている。また、前期を踏まえて、それを越えようとする前向きな記述が目立った。ただ、半年前の4月に抱いた「スタート時の目標」をずっと心に留めている学生はどれくらいいたのだろうか。後期の目標を「中間の目標」ととらえ、再び「スタート時の目標」について少し考えてみたい。

そもそも、教師としての自分が掲げた「フランス語の第一歩」という授業の「ねらい」は適切だったのだろうか。学生によっては、フランス語には多少触れることができたし、簡単な挨拶や自己紹介ができるようになったことで満足し、フランス語をちょっとかじっただけで、引き続きの受講をやめてしまった学生が出たかもしれない。

ほとんどの学生にとって、フランス語は始めて学ぶ言語であり、英語のように必修化されている言語ではないので、自発的にフランス語の授業を選択しただろうと思う。けれども、初期の目標を設定する際、そもそもフランスやフランス語に対しての知識もあまり持っていない段階で目標設定をしようとするれば、必然的に漠然としたものになる可能性がある。そこで、教師としての自分自身が、「いつかフランスへ行きたい」や「話せるようになりたい」というような漠然とした目標に、どんな方向性や具体性、または動機を与えるのが重要となってくる。現状では、具体的で明確な目標ないし動機を提示するのが、学生からであることは多くはない。「この時は〇〇、この時は〇〇」と、教師が学生を刺激するために毎回「何か」を用意することが必要とされている。教師は学生を鼓舞したり、刺激したりして、楽しませようとする。しかし楽しま

せようとするあまり、教えることが一種のエンターテインメントに陥るといことは避けなければならない。方法を間違えれば、そこからは、多少なりとも学生の甘えを誘発することにもなりかねない。そういった甘えをなるべく少なくし、「フランス語の学び」を学生自らが「自己管理」し、目的地という目標に向かって進んでいくことが大切である。

学習者から出てくるフランス語を学ぼうとする“きっかけ”としての「日常会話の習得」、「フランスへ行ってみよう」という目標は決して悪いものではない。しかし、仏検なら5級だけでなく4級、また今はたとえ週1回だけの第2外国語だとしても、今後フランス語の学習を続けて行き、3回生、4回生には、仏検3級を取得できるレベルまでに至って欲しい。

また、そもそも学習者が習得したいという「日常会話」とはいったい何なのだろうか？「自己紹介」や「簡単な挨拶」、「パン屋でのやりとり」だけが、日常会話ではないはずである。できれば学生にはその先へ、自分から自発的にコミュニケーションを発信し、フランスに旅行、ないし現地に留学したときに自分自身で状況を切り抜けることができるレベルに至って欲しいというのが本音である。

この「フランス語演習」という科目はその先に少なくともフランス語演習Ⅳまでが開講されている。この演習ⅠⅡが、どんどん先に進んでいくきっかけになって欲しい。学生がモチベーションを維持し、目標に向かって学習を続け、より先へと到達するために、私たち教師にはいったい何ができるのだろうか？

2. いかにモチベーションを作り出し、その先へと導くのか？

学生にもっと先の目標へ向かってもらうために、我々が行うことができることは。まずは、多くの学生がモチベーションにしている「仏検」である。昨今では資格ブームというくらい、資格の有無が重要視されている時代である。私自身も学生時代に、自分の能力を確かめるために、時おり仏検や DELF といった検定試験に挑戦してきた。やはり、仏検などの検定試験は、学生のモチベーションの維持にとって、大きな役割を果たすであろう。

授業オリエンテーション時には、毎年仏検を紹介するようにしている。1年生（ないし、1年目の学生）には前期で5級を、後期で4級の受験を勧めている。また、フランス語学習2年目以降の学生には3級を、

というように、それぞれの学生の到達状況に合った級を紹介している。仏検の良いところは、授業で学んだことの復習になるだけではなく、応用でもあることである。まだ授業で習っていないところも試験問題として出てくることがあるが、その場合には、「仏検補習」といって、授業外の昼休みや放課後に補習の時間を設けて対応している。

授業中の学習だけでなく、仏検に受かるためには、自主学習も必要になる。そこが最も重要である。ともすれば、受身になりがちな授業とは別に、自分で仏検合格のための道筋を作ってゆく。それは、自律学習の第一歩である。また、仏検は、大学のカリキュラムにおいても、「単位の認定」、「読みかえ」、また「留学の条件」や学校から留学する際の「奨学金の基準」にもなっていて、学生のモチベーションアップに直接つながるものである。

現在勤務している大学は、ナント大学とパリ第7大学という2つのフランスの大学と提携しており、1年ないし7ヶ月の留学制度がある。留学制度の利用のためには、仏検4級が基準級となっている。また、留学のための奨学金を受けるには、留学へ行く年次の4月までに、仏検3級の合格が義務付けられている。期日までに仏検3級に合格していれば、留学にかかる費用のほとんどを、大学が奨学金という形で負担くれる³⁾。留学を希望する学生が、経済的なことを理由に減少している傾向にある今日にあっては、学生にとっては、目指すべき目標になるのではないだろうか。

ただし、問題点もないわけではない。最近では、就職活動に影響が出ないように、大学2年次での留学を希望する学生が増えている。しかし、2年生になるまでに留学のための奨学金をもらうには、学習1年目で仏検3級レベル、というかなりハードルが高いものとなっている。

このように、仏検と留学が結びついている場合には、仏検は学生のモチベーション維持にとって、さらに効果的だと思われる。

留学も、学生のモチベーションに直接つながるものである。先に紹介したように、短期・長期での大学留学、交換留学、また、2週間のパリ研修旅行などがある。かつて仏文学科があったときのように、学校のシステムを利用してフランスに留学する学生は多くはないが、近年でも、毎年1・2名がナント大学で学んでいる。「いつかフランスに行ってみたい」という学生には、パリ研修旅行の参加を呼びかけるようにしている。その研修旅行に参加したことで世界観がガラッと

変わった経験が自分にもあるので、出来るだけ多くの学生に、学生のうちにフランスに行って欲しい。特に大学のシステムを利用する場合は、留学を取り仕切る国際交流課との協力・連携が不可欠となるだろう。

このような、授業から離れてその向こう側へとつながる大きなモチベーションの存在も大切だが、それに加えて、もちろん普通の授業でコツコツと行うモチベーション維持のための活動も非常に重要である。授業で実際に行って学生のモチベーションの維持に役立ったと考えられる活動には次のようなものがある。

〈普通の授業にて〉

- ・ *Jeu de rôles*
- ・ ディアログの暗記と発表
- ・ ゲーム的な簡単な作文
- ・ 学習補助（授業外の時間での質問時間の活用と仏検補習）
- ・ 授業を自分で管理するために、「授業シート」を毎回の授業で配る

ここにあげた *Jeu de rôles* は、特に *A la découverte* などの教科書に見られるような、ストーリー仕立ての寸劇を演じることが中心であるが、この活動の良さは、演じるために、ディアログを暗記し、動きを交えながら行えることにある。この教科書にはストーリー展開があり、毎時間物語は展開していくので、学生は楽しみながらフランス語を覚えることができる。ディアログの暗記と発表は、簡単なディアログをそのまま暗記して発表するだけではなく、いくつかのグループに分かれて、チームで元あったディアログを参考にして少しディアログをアレンジしてオリジナルのディアログを作成し、やりとり練習を進めるものである。グループは毎回違う人と組むなど、ワンパターンにならない工夫をした。その結果、クラス内で連帯感が生まれ、学生の満足度は意外と高いものとなった。

ゲーム的な簡単な作文とは、例えば形容詞を学習した時には、ある人物を想定して、その人物を、学習した形容詞を使って説明し、最後に *Qui est-ce?* というふうにして、それが誰であるかを当てるものだ。学生は、自分の好きな芸能人や有名人、またクラスの仲間を用いてクイズを出題する。自分の好きな芸能人を紹介できることもあってか、この練習もかなりの盛り上がりを見せた。

その他には、学習時間外で設けられている質問時間

を活用し、わからないところや仏検に関するなどを、気軽に質問できる環境を整えた。この時間には、毎回様々な学生がやって来るし、質問はフランス語に関するものにとどまらないが、授業中とはまた違ったきめ細かなフォローが可能となっている。また、2013 年度からは、学部で行われている Language Square⁴⁾にフランス語も参加し、さらなるバックアップ体制が整った。

このように、普段の授業に自然に組み込むことができる、学生の学びの意欲を保つような活動を日々行っていくことは、目標を明確にし、モチベーションの維持に関してもなによりも大切なことである。この時注意することは、「話せるようになりたい」という学生たちに対して、教師がどのようなシチュエーションを与えるのが重要であろうし、使用教科書を最大限に利用しながら、元あるところから少し応用し、単調さを避け、またそこから発展させることを通して、学生が自分の頭で考え、自分、またはグループでルールを見つけ、さらに発見したことを、クラス全体で共有していくことが大切であろう。

このように、学生が今いるところから、更にその先へと継続的に進んでいくことができるようにするには、まず、日々学習した内容をいかに定着させ、実際に使用できるようになるのが問われる。その時に教師が留意しなければならないのは、情報の提示の仕方であり、また様々な要素のヴァリエーションと効果的な組み合わせが不可欠である。

3. 研修で学んだことを 教育現場に活かすために

これまで、フランス語教育の本を読んだり、フランス語教育関係の学会に参加したり、関西でのフランス語教育の研究会に参加したり、また個人的に知り合いの先生方をお願いして、授業を見学させていただいたり、自分の教師としての活動を見つめなおしてきた。そして、2012 年の東京スタージュを経て、夏にケベックスタージュに参加した。東京、ケベックでのスタージュの両方の研修で重視されていたのは「グループによる共同作業」と「document authentiques を用いた授業」であった。

ケベックでの研修では、午前中はフランス語教育に関する講義が中心で、午後にはケベック州の文化に関する講義や課外学習を受けるという毎日であった。研修には他に日本で教師をされているベテランの先生や

現地のモンリオールで教師をされている方、またはインドからやってきた方などが参加しており、様々な教師たちと、フランス語教育に関する意見交換を行うことができた。そして、研修最後の総まとめである模擬授業では、研修に参加した教師がグループを組み、時には学生の立場を経験しつつ、また、教師の立場もつとめながら、研修の総まとめを行った。

モンリオール大学で学んだ実践の中で印象的だったのは、compréhension écoute や compréhension écrite のための活動で、短いテキストや chanson を、「avant-pendant-après」という段階に分けて、学生を内容理解に導くという方法論であった。この方法論では、できるだけ学生が自発的に頭を使って物事を考えるために、教師はまず、ヒントだけを与え、そこから徐々に全体像を把握させ、最後には理解したことをみなで共有する、という方法をとっていたが、これまで、このタイプの実践を行ったことがなかった自分自身にとって、とても新鮮な方法論であった。後に日本に帰ってから、改めてフランス語教育法の文献や書籍を読みると、この方法はもうすでに、何十年も前に紹介されたものだということがわかったが、形を少しづつ変えながらも、効果的な方法論として、何度も紹介されているものであった。今回これらの方法論がとても新鮮に思われたのは、このような、フランスやその他の外国で定番として実施されているものが、日本の教育現場でなかなか実行できていないということが現実としてあったものと思われる。

モンリオール大学で実践してみたことはとてもためになったし、まず自分が学生としてその方法を体験した上で、教師として模擬授業行ったということはとても有益であった。特に先に挙げた「avant-pendant-après」という活動を行えば、学生の印象にも残るし、フランス語のテキストを読むということも自然に経験できる。しかし、この方法論を、直接今の自分の授業で実践できるかといえば、それはそんなに簡単ではないということも感じた。普段は、初級のクラスを担当することが多いが、このケベックで学んだ方法論を初級者に導入するには、少し工夫が必要である。

また、ケベックの大学で他に行われている実践には、「文通する」、「skype で外国の学生と話させる」、「skype で自己紹介をする」、「日記を書く」、「新聞を作る」、「小冊子 (brochure) や時間割を作る」、「旅行を準備する」、「students of the world.inf/ や cursus.edu のサイトで世界中でフランス語を学んでいる学生と出会う」などの、実生活に沿った具体的な実践があっ

た。以上のことは、確かに興味深く、これまで習得した学習内容を確認・発展させるツールとしては、ものすごく有効である。しかし、これらの活動を実践できるようにするために、まずは、結局は基礎知識の習得が不可欠であることを、再認識するに至った。結局のところ、現段階では、基礎知識の習得について何ができるかを考えなければならないであろう。

モントリオール大学では、夏期の講習以外でも、付属の語学学校での夏のプログラムで様々な面白い工夫がなされていた。各国（特にアメリカ）からやって来た学生のためのプログラムでは、ケベック文化の紹介を積極的に取り入れ、エクスカッションに参加する度にスタンプを集め、スタンプの数に応じて景品が貰えたり、ケベック州というバイリンガルの州ならではの取り組みとしては、「Pour moi, c'est en français... (私には、フランス語で)」と書かれたバッチを配り、フランス語で会話するという意識を高める、面白い工夫がなされていた。

また、ケベックスタージュに参加し思ったことは、「英語もフランス語も」という欲張りな学生を惹きつけるのに、ケベックは大変良い場所だということである。その場所を、新たなフランス語学習の留学先として開拓することは、学生のモチベーション維持や刺激に、もっと積極的に活用されるべきだと感じた。

というように、ケベックスタージュでの経験は、教師としての自分にはすぐによい糧となったが、自分が対象としている学生にこの方法論を用いるには、課題も多い。ここで学んだことが、できるだけ早く実行することができるよう、まずは地道な努力を続けなければならない。

4. おわりに

これまで、学生のかかげた目標を明らかにし、さらにモチベーションの維持について考えながら、まず自分の普段の実践において、課題となったところ、うまくいったところなどを紹介してきた。学生の「日常会話ができる」や「フランスに行ってみよう」という「スタート時の目標」に答えながら、もう少し具体的になる「中間の目標」を超え、さらに「具体的な自分なりの目標」といったゴールへと導かねばならない。

スタート時の目標を超え、学生を更にその先へと導くためには、教師は、学生をそれぞれの目的地へ到着させるための道筋を示し、その上で、学生が自分で考えて進む力を育成しなければならない。この考え方

は、私がモントリオール大学で学んだ方法論の目的と一致する。時に、高い目標を立てすぎたあまり、途中で挫折し、フランス語をやめてしまう学生などが出ることもあるが、教師としての自分が、その道筋を上手に示してあげることが大切である。そんなとき、自分がどんな教師であるべきか？理想的な教師とはどういう人か？自分はどのような先生か、私には何ができるのか？ということ自問し、自分のタイプと理想を認識することも必要である。

また、「いつかは〇〇できる」というのも確かに大切だが、「今何ができるか？」ということ、コツコツと積み上げること。「いつかの〇〇のため」に、基礎を確実に、達成感を覚えながらこなしていくことが、学生の目標達成のためのモチベーションの維持には必要なことである。学生からの複数の要請に答えるのは難しい。だからこそ、基本を大切に。基本をコツコツとこなすために、何が必要なかを日々考えること。また、実践だけでなく、理論と実践の両方を踏まえた授業づくりをしていきたい。そして研修でも経験し、近年注目されている「l'approche coopérative 協同学習」を授業に取り入れたい。

そして教科の垣根や「中学」「高校」「大学」といったカテゴリーから出て、今一度伝統的な日本の教育においての実践理論も紐解くことで、また新たなヒントが得られるのではないかと考えている。様々な実践がある中で、自分が一体どういう方法論を選んで実践していくのか。それを追求するとともに、いかにフランス語履修者の人口を増やしていくのか、今後予想されるアフリカ大陸の発展を考えれば、それは不可欠のことである。

日本におけるフランス語教育の未来を見据え、まずは同じ思いをともにする研究者とともに前進し、また学生とともに、よりよい授業を探し求めて、努力を続けたい。

注

- 1) 関西フランス語教育研究会 (RPK) に関しては <http://www.rpkansai.com/rpk.html> を参照のこと。以下 RPK と略称を使用。
- 2) 本スタージュに関しては、東辰之介、「2012年度ケベック・スタージュ報告」, *Revue japonaise de didactique du français* 8-1, 2013, pp.216-218. また、土屋良二、小坂橋淳、水野いずみ、西川葉澄、吉澤英樹、「カナダ・モントリオール大学における教員研修－日本のフランス語教育における実践の可能性－Bilan du stage au Québec 2011」, *RENCONTRES* 26, pp.58-62. を参照のこと。
- 3) 詳細は大学ホームページに記載。

- 4) Language Square とは、本大学の多文化コミュニケーション学科で昼休みを活用して行われている第二外国語等の授業外活動の企画。フランス語以外に、インドネシア語や韓国語の講座が開かれている。